

## 第13回(2009. 4. 7 配信)

## 雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「4月はお釈迦さま」

4月8日は「花祭り」である。花祭りは、仏教でいう灌仏会(かんぶつえ)あるいは降誕会といって、釈迦の誕生日である。もともとこの日は、家の中での農作業の準備をおえて、野外での作業がよいよ忙しい時期にはいるということで、古くからさまざまな習慣があった。多くの地方では、田の神様が降りてくる日だともいわれて、農作業が休みだった。

この日は、花で飾った御堂を造って釈迦の像を安置して甘茶をかけるのだが、甘茶をかけるのは、生まれたばかりの釈迦の体に、天から9匹の竜が清めの水をかけたという伝説に由来しており、御堂に花を飾るのは、釈迦が生まれた果樹園を現したものであるという。釈迦は紀元前560年ごろインドのカピラバストウ国の皇子として4月8日に誕生した。一説には紀元前463年ごろともいわれているが、日本の縄文時代後期のことである。母のマーヤー妃は、釈迦を産んですぐに亡くなったが、マーヤー妃が無憂樹の赤い花を手折ろうと手を挙げた瞬間、脇の下から釈迦が誕生したという伝説もある。

灌仏会は、推古天皇の時代(7世紀初頭)から行われていた行事だが、花祭りというようになったのは、明治45年(1912)に仏教青年伝道会が浅草で行ったのが最初で、その後各地で年中行事となっらしい。花祭りの釈迦の像が右手を挙げて天を指し、左手を下げて地を指しているのは、生まれたとたんに、7歩歩いて天と地を指さし、東西南北、天地の六方に向かって、「天上天下唯我独尊」といった伝説に基づいている。この唯我独尊を自分一人だけが尊いのだという意味には違えている人が多いようだが、すべての生き物に宿っている生命一つ一つが等しく尊いという意味なのである。

釈迦は、「釈迦牟尼」の省略である。釈迦族の聖人の意味だともいわれている。本名はゴータマ・シッダールダといい、16歳で結婚して1児をもうけたが、諸行無常を感じ29歳で出家した。その後修業をつみ、人々に「煩惱の灯を消し無我の境地に入る悟り」を教えたという。釈迦はマラヤバティー河岸の「沙羅双樹」の林の中で80歳の生涯を終えた。紀元前383年あるいは480年ともいわれている。なお、個人の家にも植えられている沙羅双樹の木はナツツバキである。釈迦の沙羅双樹はフタバガキ科のサラノキという幹の直径2m、樹木の高さ50mにもなる常緑灌木で淡黄色の花が咲く。

釈迦は、北枕で右脇を下にして亡くなったので、仏教では人が亡くなると北枕にするのだというが、旧暦の2月15日には、お寺で涅槃会(ねはんえ)が行われる。涅槃とは、サンスクリット語でニルバーナといい、吹き消されたという意味だそうだが、あらゆる煩惱の火が吹き消され、究極の安心の境地、つまり悟りを開いた状態のことであるという。灌仏会にしる涅槃会にしる、「会」は「え」と読む。「えっ!？」などとダジャレをいってはいけない。神聖な仏教の法会(ほうえ)は、宴会じゃあない。

仏教では、釈迦が亡くなってこの世は闇になったが、56億7千万年後に釈迦の後継者が現れるという。それが「弥勒菩薩」だが、現在は修行中だから「菩薩」なので、悟りを開かれたら「如来」になる。この気の遠くなるような年数は、弥勒菩薩が修行している兜率天(とそつてん)という場所の1日は、現世の400年にあたり、ここでの修行は4000年だから、計算するとおよそ5億7千6百万年になるが、いつのころか56億7千万年という数字になったという。365×400×4000では5億7千6百万年にはならないという人もいるだろうが、旧暦では1年が360日である。また、兜率天での1

日が現世の400日ではなく4000日で、計算すると57億6千万年だが、だれかが7と6とを間違っ  
て伝えたという説もある。

弥勒菩薩が釈迦の後継者になるまで、この暗い闇の世の中を、愚者である諸君の手を牽いて  
導いてくれるのは「地蔵菩薩」だといわれている。地蔵菩薩は、六道を自らの足で行脚して、水子  
の魂を救ったり弱い者を助けたり、人々の身代わりになって困っている人を救済したという話が多  
くあって、人々から信仰されている。六道とは、仏教では輪廻転生(りんねてんしょう)といって、人  
間は六つの世界を生まれ変わり続けるといわれている。その六つが天道(楽)、人間道(苦)、阿修  
羅道(怒)、畜生道(無恥)、餓鬼道(欲)、地獄道(極限の苦)をいう。そこで、六地蔵といって6体  
の地蔵が建てられていることもある。また、地蔵菩薩の立っている下に餓鬼道の入口があって、お  
地蔵さまに水をかけると飢餓に苦しんでいる人が餓え渴きをしのげるという信仰もある。それだけ  
に、他の仏像とは違って、寺の境内や道端や辻など人々の日常生活する場所の近くに建てられ  
ていることが多い。

日本における仏教の始まりは、百濟の聖明王から欽明天皇に、黄金の仏像と教典が贈られた時  
(538年または552年という説もある)ではないかといわれている。この仏像が一光三尊阿弥陀如来  
像で、廃仏派の手により堀に捨てられていたのを、信濃の国司の従者の本田善光が持ち帰って  
祀ったのが、長野の名刹「善光寺」であるという。学者と名乗る者のなかには異論をはさむ人もい  
るが、雲竹斎は善光寺の近くで生まれたから確かだと信じている。この仏像は秘仏で見ることができ  
ないが、その前方に安置される前立本尊は7年に一度拝観が許される。今年もその年にあたり4  
月5日から5月31日まで行われる。この秘仏を巡って甲斐の武田信玄と越後の上杉謙信が川中  
島平で死闘を繰り返したのは有名である。

その後、仏教に反対する物部氏と、受け入れようとする蘇我氏との間に争いが起きるが、蘇我氏  
が主導権を握り、594年、推古天皇が仏法興隆の詔を発して以来、豪族たちが次々と寺院を建設  
し始めた。604年、聖徳太子が憲法17条の中で、篤く三宝(仏法僧)を敬えと制定した。こうして仏  
教は国家の庇護を受けるようになり、奈良時代に入ると、聖武天皇は各地に国分寺、国分尼寺を  
建立するように詔を発し、奈良に東大寺を建立して仏教は急速に発展していった。しかし、この頃  
の仏教は、貴族を中心とした信仰であって、寺院の力がたびたび政治へ介入するという弊害が起  
きるようになった。一般庶民や女性たちもが信仰するようになったのは鎌倉時代で、法然・房山が  
浄土宗を興し、親鸞が浄土真宗を開いて、難しい学問や厳しい修行など必要なく、ただ一心に念  
仏を唱えれば極楽往生すると説いた。それ以降は信者の団結が強まり、組織化されて、一向一揆  
などのように大名に抵抗し、戦いを挑んだりした。

わが国では、仏教を広める目的もあって、方便として神と仏を一体化して説明した。これを「神仏  
習合」という。ところが、明治時代に天皇を頂点とする神道が見直され、仏教の排斥運動が起きた。  
「廃仏毀釈」といい、仏教を廃し、釈迦の教えを棄却することで、その結果多くのお寺は廃寺に追  
い込まれたが、これによって全国でおよそ半分の寺院が廃寺になったといわれる。中国でも、1966  
年からはじまった文化大革命は、毛沢東の権力回復のために行われたというが、紅衛兵の学園闘  
争から中国全土に広がり、チベットにも飛び火し、寺院・仏像などの文化財が多数破壊され、僧侶  
や知識人も追放されたり投獄あるいは殺害されたりした。そのとき、私たちは尊い人命や文化財が  
失われることに心を痛み、めっちゃめっちゃ非難したものだが、我われが生まれるほんの少し前に、中  
国と同じことをしていたのである。